

広報つばめ Tsubame

12.1

No.352

2020年12月1日号
毎月1日・15日発行



＼ 燕応援フェニックスクーポン券 /
第2弾
500円割引
有効期限：2021年2月28日まで
新型コロナウイルス感染症緊急対策
フェニックス+
登録店舗でのみ使用可能。本券をコピーしての使用不可

市内の対象店舗で利用できる
「燕応援フェニックスクーポン」
を15ページに掲載！

よこやまみさお
横山操展、はじまる。
横山操生誕100年

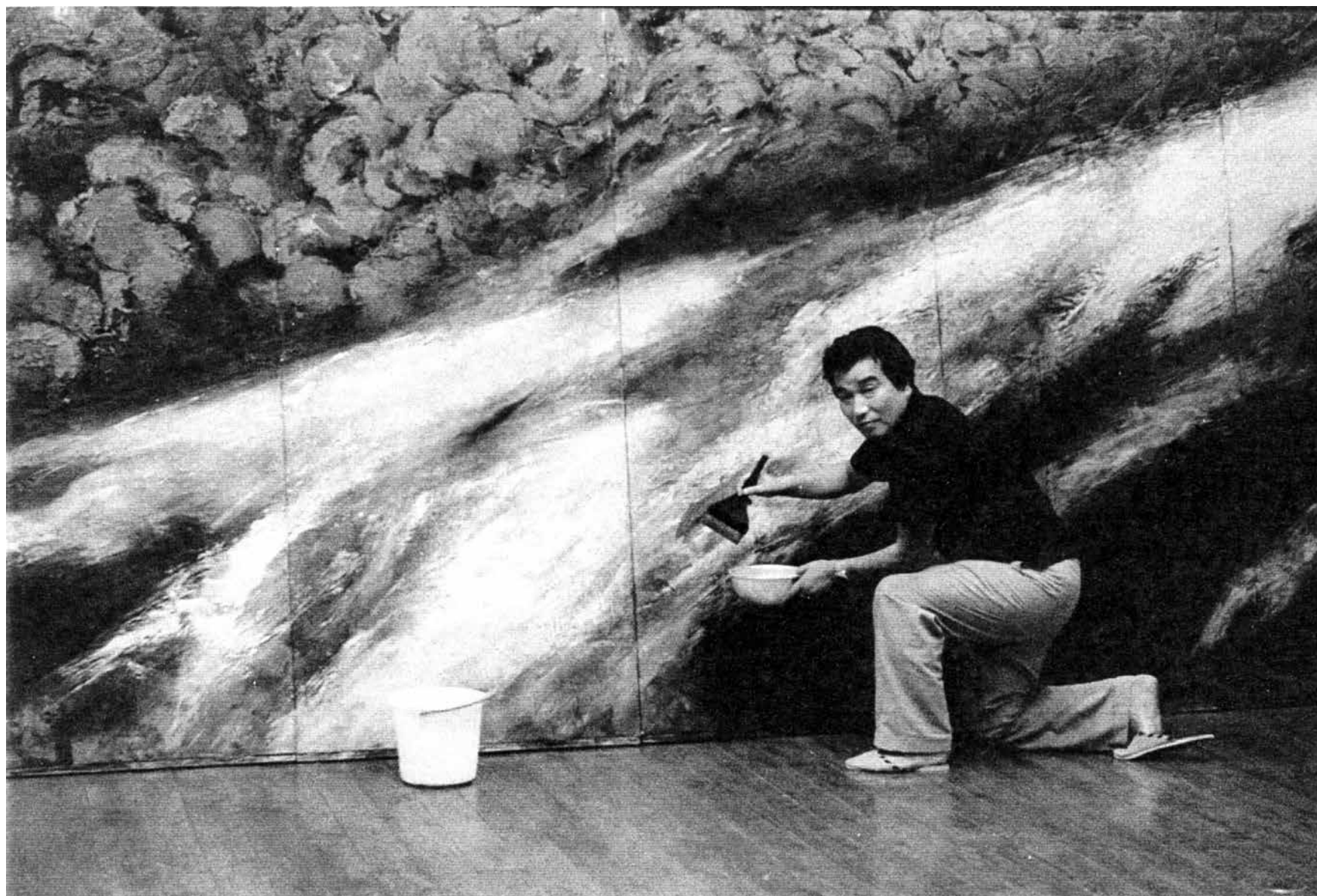


● 燕市産業史料館に運び込まれる《送電源》

展示会では《渡船場》や《送電源》などのほか、画業初期の彩色画やその下絵なども展示されます。

よこやまみさお 横山操 生誕100年 燕市吉田が生んだ 炎の画家の足跡を辿る

戦後を代表する日本画家の一人で、燕市名誉市民でもある横山操さん。彼が旧吉田町に生まれてから今年で100年を迎えます。従来の優雅で奥ゆかしい日本画に真っ向から対立し、黒く荒々しい筆致で人々の生活や工業風景、山の噴火や塔の火災など、時事性の高い一瞬の景色を描いた操さん。これまでなかったジャーナリズム的な視点を取り入れ、戦後の日本画に革命を起こしました。12月4日(金)から燕市産業史料館で開催される企画展にあわせ、今号では、そんな日本画壇の風雲児、横山操さんをご紹介します。



熱情と奮激の画家 横山操

大正9年に旧吉田町に生まれた横山操さん。尋常高等小学校卒業後、画家を志し、14歳で上京します。昭和14年に川端画学校に入学し日本画を学ぶと、翌年、第12回青龍展で初入選。そこで人生の師となる川端龍子と出会います。しかし、その後戦争に召集され、さらに終戦後は捕虜としてシベリアに抑留、石炭採掘に従事します。従軍に5年、抑留に5年。20歳からの多感な時期を、戦争の中で過ごしました。

そんな操さんが本格的に画家として歩み始めたのは復員後、30歳になってからです。青龍社に復帰し、画家とネオンデザイナーとして制作に励みます。

「熱情と奮激、これが俺の人生だ」自分の写っている写真の裏に書きつけたその言葉の通り、戦争で抑圧されたエネルギーを解放するかのようになんげに意欲作を発表。操さんの初期の絵は大型の作品が多く、黒く真っ直ぐな縦横の線、少ない色、トリミングしたような構図が特徴で、そのテーマも、現実的で大衆に親近感を抱かせるものばかり

でした。この新しいスタイルは当時の日本画壇に衝撃を与えます。

昭和37年に青龍社を脱退した後は無所属で活動。多摩美術大学で後進の実技指導にもあたるほか、この頃より水墨画を描き始めます。

精力的な制作を続けていた操さんでしたが、51歳の時に脳卒中で倒れ、右半身不随に。しかし、必死のリハビリの末、左手で制作を再開し、精神性の深い新しい境地の作品を生み出します。その後、再び脳卒中を起こし、53歳でその生涯を閉じるまで、操さんは折れることなく絵を描き続けました。

大正9年	旧西蒲原郡吉田町に生まれる。
昭和2年	吉田町立尋常小学校入学。
昭和9年	吉田町立尋常高等小学校卒業後、画家を目指して上京。洋画家の石川雅山のもとで一壺堂図案社の版画やポスター描きを手伝う。
昭和13年	第25回光風会展で《街裏》が初入選。
昭和14年	川端画学校日本画部(夜間部)に入学。第2回新興美術院展で《隅田河岸》が初入選。
昭和15年	第12回青龍展に《渡船場》が初入選。12月に徴兵され、中国大陸を転戦する。
昭和20年	終戦と同時にシベリア(カザフ共和国、現カザフスタン)カラガンダの23区第9収容所に抑留、石炭採掘に従事。
昭和25年	吉田町に帰郷、その後再び上京し、一壺堂図案社、不二ネオン会社でデザインの仕事を。9月、青龍社復帰。
昭和26年	結婚。
昭和28年	春の青龍展で《白壁の家》が春展賞受賞。ここから青龍社最高位の社人となるまで6年間で11回連続で受賞する。このほか、晩年まで各公募展に意欲的に出品する。
昭和31年	初個展を銀座松坂屋で開催。第28回青龍展で《炎炎桜島》が青龍賞受賞。
昭和37年	青龍社脱退。
昭和38年	東京画廊で「越後風景展」を開催。
昭和41年	多摩美術大学日本画科の教授に就任。川端龍子逝去。
昭和46年	脳卒中で倒れ、右半身不随に。その後左手で制作に取り組む。
昭和48年	制作途中に倒れ、逝去。享年53歳。
平成12年	吉田町名誉市民となる。
平成18年	燕市名誉市民となる(合併による)。

●青龍社

日本画団体。昭和3年に日本美術院を脱退した川端龍子を主宰者として発足。大きな空間にも耐える強い絵画を目指した(会場芸術)。春秋2回の展覧会を開き、戦時体制下でも活動を続けたが、昭和41年、龍子の逝去とともに解散。その間、帝展(新文展一日展)、院展と肩を並べる日本画壇の一大勢力に成長した。



▶青龍社新年会にて。後列左が操さん、前列中央が龍子。

《十勝岳》制作風景。飛行機で取材を行い、幅6.3メートルの大作をわずか2カ月で描きあげました。▶



▲少年時代の操さん(左)と友人。昭和5年頃。

センチメンタルな男 横山操

●すべてのはじまり《渡船場》

操さんは大正9年1月25日、旧吉田町に生まれ、横山家の養子になります。幼いころから絵を描くことが好きな少年でした。卒業後、画家を志し14歳で東京、川端画学校日本画部の夜間部で絵画の基礎を学びました。昭和15年9月、第12回青龍展に《渡船場》を初出品し、入選します。青龍展を主宰する川端龍子(りゅうし)は、この絵を見て「これが君と青龍社をつなぐ渡し舟になるといいね」と声をかけたそうです。挿絵画家から日本画の大家になった龍子を目標にしていた操さんはその言葉に大変感動し、日本画への想いを新たにしますが、12月に軍隊に召集され、本格的に絵を描き始めることはできませんでした。しかし、従軍・捕虜時代も絵を描き続け、復員後はすぐに青龍社に入会。渡船場の絵は確かに二人をつなぎ、操さんは龍子のもとでいくつもの傑作を生み出します。

●人間のふたつ

シベリアから復員した操さんは、吉田町に帰郷するも、2カ月で再び東京。東京を拠点に活動します。町の人たちと直接的に関わることは少なかったようですが、画家として成功した後も、新潟市へは頻繁に訪れていたということ。操さんは新潟からタクシーで吉田まで出向き、スケッチをしていました。晩年に至るまで、新潟県や吉田町の風景を描いた作品を多く残しています。吉田の街があり、少し行くとすぐに草原があり、そこにハザル

が立ち並び、西川が流れ、弥彦山や角田山に日が沈んでいく風景。それは操さんの心に原風景として刻まれ、ひとつのイメージとして作品中に繰り返し登場します。尋常高等小学校時代の恩師への手紙には、画家への道を歩み始めたばかりの操さんの心境が綴られていきます。差出人の文言は「センチメンタルな男 横山操」。彼の心の中には常に吉田町があり、遠く東京の地で、その郷愁は創作意欲の大きな原動力となりました。



▲操さんが過ごした吉田の商店街(撮影年不明)。



▲『吉田の学校を描こう。そしてヤヒコ(山も)…限らない嬉しさで一ツパイです。』

初期作品群発見から10年 修復と恩師について聞く

平成21年、操さんが10代後半から20歳にかけて制作したスケッチ29点、下絵5点、本画5点が燕市へ寄贈されました。その修復をつとめた、操さんの教え子であり、自身も多摩美術大学教授である、日本画家の中野嘉之さんにお話を伺いました。

なかの よしゆき
中野 嘉之さん

(日本画家、多摩美術大学名誉教授)



●しんみりしながら修復しました
――操さんの初期の作品をご覧になったときはどう思われましたか？
とても驚きました。戦争で全て焼失したと思っていたので。修復した絵は5点。全部、絵の具が割れて横に線が入ってしまっていました。
――修復の様子を教えてください。
先生の紙に近い紙で新しく裏打ちをして、それから彩色をしました。先生の塗った色を再現するために、絵の具を別の紙で色合わせをし、割れた部分をコップコップ修正していきました。

破損箇所を先生が即席で直したところもあり、それは取り除かずそのまま修復しました。描いていた時、相当急いでいたのかもしれないね。修復作業は私一人で行ったので、全部直すのに1年ほどかかりました。しんみりと色んな事を思い出しながら直していきながら、修復に携われてよかったです。

●実感をする、体感をする、感じる
――操さんの人柄は？
優しく、面倒見の良い人でした。しよっちゆう(学生)を引き連れて飲みに行っていましたね。でも私たちがヘトヘトになって寝ても、先生はアトリで絵を描いていました。いつ寝ていたんだろう(笑)
――凄い人だったんですね。でもちょっと淋(さび)しげな感じもありました。朗らかに飲んでいるのに、あるときすっと引いて物思いにふけるというか。学生の面倒をみたり話を聞いたりしながら、ふと自分



▲修復時の資料(写真上《隅田河岸》、写真下《貨車》)。作品は絵の具が割れていたほか、穴が空いていたものも。

のことを思い返したりしたのかもしれない。
――操さんからはどのような指導を受けられましたか？
絵の精神性、「何が描きたいのか」ということですね。「物を見るときには自分で実感をする、体感をする、感じる。感激しないと物事を自分で取り込むことはできない」というようなことをおっしゃっていました。「スケッチブックを手離さず、いつも瞬間瞬間、いいなと思ったときにそれをすぐ写し取る訓練をしろ」と。その教えを今も守っています。
――今も、ですか。
先生とお会いしてお別れするまで10年くらいなんです。が、とても濃厚な時間でした。そのときの影響が今も残っています。「ここまで描いてこられたのは、先生の教えと
想いが心に染み込んでいるからですね。
先生がそうやって私たちの世代を育ててくれた恩返しとして、私も若い世代を育てようと頑張っています。
――平成23年、操さんの故郷である燕市で講演をしていただきました。
その時、燕市を回って、弥彦山に登りました。ちょうど田んぼに水が張って、まるで湖みたいでした。これが全部雪になったとき雪原が生まれるんだと。先生の初期の頃の水墨画ですね、そういう絵を思い出しながら、眺めていました。
燕という場所を先生の作品を通して見ると、なんとも不思議な感覚でした。初めて見るのに懐かしい。絵で覚えているんですよ。いい町だと思いつつ見えていました。



愛称は「地球儀」「サボテン」など▶

▼ 富山県最大の繁華街、総曲輪通りのアーケードも操さんのデザイン。ネオンの明滅で花馬車が動いているように見えます。



戦後、日本のグラフィックデザインを牽引していた亀倉雄策さんも旧吉田町の出身です。4歳年下の操さんもまた、デザインの世界で功績を残しています。そのうちのひとつが、昭和28年に銀座に設置された森永製菓広告塔。地球儀で言うところの緯線・経線方向に張り巡らされた光の線が点滅し、赤道にあたる部分には「森永ミルクキャラメル」「森永チョコレート」の文字が回転する仕掛けがほどこされています。第6回広告電通賞を受賞したこの広告は銀座の広告塔のはしりとされ、夜空に輝くネオンの地球は、戦後復興の象徴として人々の心を明るく照らしました。

かめくら ゆうさく
亀倉 雄策 さん (大正4年4月6日—平成9年5月11日)

旧吉田町出身のグラフィックデザイナー。燕市名誉市民。1964年の東京オリンピックのポスターやグッドデザイン賞のロゴマークをはじめとして、多くの素晴らしいデザインを世に発表。昭和55年紫綬褒章受章。平成3年文化功労者選出。

教師としての操

昭和40年から、操さんは多摩美術大学で実技指導にあたります。翌年に日本画科教授に就任し、素晴らしい指導力を発揮しました。当時は安保闘争により学生運動が活発で、大学の休校が相次いでいましたが、その中でも操さんは学生思いの先生として評判でした。操さんはよく学生たちを自宅に呼んで話をしたり、作品を見てあげていました。金銭的に苦しい生徒に対しては、住まいや学資、留学費用などの援助も惜しみませんでした。一方で指導は厳しく、学生の描いたキャバツの絵にやかんでお湯をかけて「こんなキャバツ食べるか。やり直し」なんてエピソードも。

●「横山様式」で常識を破る

青龍社に入会した操さんはすぐに頭角を現し、青龍展受賞の常連となります。特に、昭和31年の《炎炎桜島》は青龍展始まって以来二人目となる最高賞の青龍賞に選出。それまで過去27年の歴史の中で受賞者は落合朗風だけであり、これは大変な快挙でした。操さんは横山様式と呼ばれる作風を作り上げ、観客を圧倒する大作を次々に発表します。画題、大きさ、色使い、構成に至るまで、これまでの常識を覆した「新しい日本画」を

世間に突きつけました。

龍子に次ぐ存在として知名度を上げますが、その一方で、古参メンバーの風当たりは年々強くなります。昭和37年、操さんは青龍社を脱退。青龍社時代の作品の大半を焼却処分し、後ろ盾のない中、自分の作風で戦うことを決意します。

●「一日一日を大切に烈しく生きなければならぬ」

無所属となっても、その人気は衰えませんが、特に、親しみやすさと分かりやすさで日本人の心を捉えた富

士山のシリーズは、操さんの代名詞となり、注文が途絶えず、数多く制作されました。売り絵が好調な中、操さんは「水墨こそがこれからの日本画を支える」と主張し、水墨画を描き始めます。その頃の作品《越路十景》は、

八景が越後(新潟県)、二景は越前(福井県)と越中(富山県)で、いくつもの挑戦的な技法を取り入れながら、郷里の姿を穏やかに捉えています。順調に作家活動を行っていた操さんでしたが、昭和46年に脳卒中で倒れ、右半身不随に。筆も持てず、

画家として絶望的な状況になります。が、決して諦めませんでした。「絵かきは絵が描けなくなったら死んだ方がいいのだ。だから生命がある限り、一日一日を大切に烈しく生きなければならぬ」とよく口にしていたと言います。左手で絵を描く訓練を重ね、1年半後に展覧会に出品するまでに復活。静謐で情感漂う作品を20点ほど残しています。

亡くなる直前まで絵を描いていた操さん。画学校時代から晩年に至るまで、生涯を賭けて常に日本画に向き合い続けました。

操と青龍社、それから



▲ 左手で制作をする操さん。墨は奥さんの基子さんがすっていました。絵を描きたいという強い希望により、リハビリセンターを退所し、家で落款の「操」という字の練習から始めたそうです。



▲ アトリエでの1枚。整然と並ぶ画材に
几帳面な性格が伺えます。

●参考文献 木村拓也 (2019)「燃える魂の画家・横山操」『青龍社創立九十周年特別展 龍子と同時代の画家たち』大田区文化振興協会 93-95頁 / 横山秀樹 (2008)「日本画壇の風雲児 横山操の生涯」『花美術館』vol.5 株式会社花美術館 4-35頁 / 横山秀樹 (2020)「横山操の知られざる顔」『生誕100年記念 日本画家・横山操—その画業と知られざる顔』富山県水墨美術館、新潟市新津美術館、アートインプレッション 6-19頁
●写真は取材過程で関係者より提供。掲載関係者でご連絡のつかなかった方がおります。関係者の方は、お手数ですが地域振興課広報広聴係までご連絡ください。

約20年という「画家人生」としては決して長くはない年月の中で、匠の画業を残した操さん。亡くなって約50年経つ今も、日本画の世界に影響を与え続けています。

若いころから確かな実力を持ち、才能に溢れていた一方で、従軍・抑留や青龍社との軋轢、病氣など、画家人生を阻もうとするものはたくさんありました。自らを奮い立たせて乗り越えてきました。

「熱情と奮激、これが俺の人生だ」ある意味では社会に振り回されてしまった不遇の生涯でありながら、それを制作の糧とし、情熱を持って駆け抜けた彼の生き様は、コロナ禍に苦しむ今の私たちに重なり、これからの生活のヒントを与えてくれるかもしれません。

「横山操の作品は残ります。 本当にすごい絵は時代を超えて残るんです」

昭和48年に操さんが亡くなってから、47年の月日が過ぎました。残された作品たちの凄さはどこにあるのでしょうか。平成21年に操さんの初期作品の鑑定も行った、美術評論家の横山秀樹さんにお話を伺いました。



よこやま ひでき
横山 秀樹さん
(前新潟市新津美術館館長、美術評論家)

●時代を超えて残る
——日本画に取り上げられないようなものにフォーカスしていた操さん。当時から評価は高かったのでしょうか？

「評価」の定義はなかなか難しいですね。評論家と一般人が良いと言いつ絵は違います。青龍社の人たちと龍子でも意見は異なりました。

でも斬新で新しい日本画のスタイルであったのは間違いありません。

操の凄いところは、今彼の作品を見てもその価値が分かることです。作品に古さを感じません。50年以上前に描かれたものでも現代に通用しています。これをあの時代に描

いたというのは相当なものですね。操の作品は残ります。本当にすごい絵は時代を超えて残るんです。

——残る、とは？

例えば、尾形光琳の『紅白梅図屏風』を見た時に「ああ、すごいなあ」と思いますよね。あれは、300年前に描かれたものですが、今もなお、私たちの精神を揺さぶるものがあるわけです。それが絵が残る」ということ。そして、操の絵もそうやっていく可能性を秘めているんです。

操が亡くなってから50年近く経ち、横山操の絵を知らない人が増えていますが、それは口頭見る機会がないからであって、絵自体が悪くて残らないのとは話が違います。

そういう意味では、戦後の作家の中でこれからも影響力をもち続ける一人ですね。

——確かに、その画業に比べて知名度は低く感じます。没後70年までは著作権で保護されます。そのため、著作

権料がネックになり、亡くなった近代の作家の紹介をするのはすごく大変なんです。70年経てばその負担もなくなりますが、その間に消えていってしまう作家もたくさんいます。歯がゆいですね。著作権が作家を守っているのも事実ですので、難しいところですが……。

操の企画展も随分久しぶりです。ぜひ横山操の作品の魅力に触れ、こういう作家がいたのだと、多くの人たちに知ってもらいたいですね。

●時代を先取っていた証明
——燕市産業史料館では、初期の作品を中心に展示しますね。

これまで、操の初期の作品はすでに存在しないものと思われていました。ですので、こんなにまとまって、しかも画学校時代のものが出てきたというのは



▲ 鑑定時の様子。平成21年撮影。

衝撃でした。戦後の代表作はあらかた美術館に入りましたが、戦前に書かれたものは本当に燕市にしかありません。今までは戦後の作品を見て横山操について論じてきましたが、これからはここから話をしていくことになる。これはものすごく大きな発見なんですよ。

でも実際、当時これらの作品が大家に受け入れられるのは難しかったと思いますね。龍子だから彼の才能を見抜けたけれど、他の人だったら戦後まではおそらく無理だったのではないのでしょうか。そういった先進性を示す意味でも、貴重な資料であると思います。

横山操 生誕100周年記念展覧会 「はじまりの物語。時代を見つめた眼差し。」

12月4日(金)～1月11日(祝)

- 会場 燕市産業史料館 ●開館時間 9:00～16:30
- 入館料 大人400円、小・中学生・高校生100円 ※燕市民は期間中無料
- 休館日 月曜日(1月11日(祝)は開館)、12月28日(月)～1月4日(月)
- 問合せ 社会教育課 文化振興係 ☎0256・63・7002